皇學館大学 地域社会研究会
活 動 報 告

Ⅰ．グループが活動を始めたきっかけ

現代日本社会学部の学会組織である現代日本学会の下部組織に位置付けられる研究 部会の一つとして、平成 22 年 10 月 30 日の現代日本学会第 1 回総会で、「地域社会研究 部会」という名称で開設が承認されたのがきっかけです。また、平成 22 年度皇學館大学 現代日本社会学部「サテライト教室」事業の一環である「現代日本社会の課題－地域連 携に関わる大学－」先進取組視察として、平成 22 年 11 月 6.7 に香川大学で開催された「全国まちづくりカレッジ 2010in 直島」に参加したことがもう一つのきっかけである。

学内では平成 23 年 3 月 1 日に地域社会研究会として活動を開始しました。対外的には平成 23 年 4 月 1 日に「皇學館大学地域社会研究会」として、いせ市民活動センターの登 録団体となった。

Ⅱ．活動の目的

「皇學館大学地域社会研究会会則」の第３条に記載されている。
第 3 条　　本会は地域社会における研究や活動の促進をはかることを目的とする。

Ⅲ．グループメンバーの構成

皇學館大学現代日本社会学部教諭 筒井琢磨先生、藤井恭子先生
学生　４回生７名、３回生７名、２回生４ 名、 １回生５名の計１９名で活動しています。

Ⅳ．現在の主な取り組み事例

① 例会

毎週木曜日に例会を行っている。場所は、皇學館大学の現代日本社会学科研究室や百船、宇治山田駅前の駅前ちょっとラボ、伊勢銀座新道商店街内のまちなか研究室で行っている。

② 宇治☆山田プロジェクト

宇治☆山田プロジェクトは、平成２３年度からの継続事業である。

平成２２年度は、伊勢銀座新道商店街（伊勢市）の「伊勢の夜祭」と宇治橋通り商店街（京都府宇治市）の「宇治橋通りにぎわいフェスタ」に出店をした。伊勢の夜祭では、岩手県山田町の「山田の醤油」使った焼きイカと焼きトウモロコシを販売した。宇治橋通りにぎわいフェスタでは、伊勢茶と伊勢うどんを販売した。平成２４年度は「宇治山田=伊勢」の魅力発信として、以前からから参加している「全国まちづくりカレッジ」を伊勢で開催した。

今年度は、神宮で式年遷宮が行われ観光客が増加することが予想される。そこで、伊勢の魅力は神宮だけではなく、この機会により多くの伊勢を知ってもらい少しでも伊勢について知ってもらい、興味をもってもらおうと企画した。

全国まちづくりカレッジ2013 in 東京（東京都港区：明治学院大学）において、伊勢の魅力を発信するＰＲ活動、プレゼンテーション具体的には、伊勢や観光地のイメージや求めるものなどを明治学院大学に協力していただき、アンケート調査を行い。物販やＰＲ活動、プレゼンテーションに活用した。

また、今年度は私達だけではなく、伊勢市や伊勢市観光協会などとの連携を行い、私達学生がＰＲするだけではなく、行政と学生が一緒になって伊勢のＰＲ活動を行うことができた。

③ 高柳商店街「高柳の夜店」

高柳商店街の高柳の夜店において、ゲームコーナーのゲーム機を作製した。

高柳の夜店は６月から７月上旬の１、６、３、８の付く日と土曜日に行われる。研究会では、射的とスマートボールのふたつを作成した。また、夜店で作製したゲーム機が使われている様子もテレビ放送で生中継していただいた。

④ 伊勢銀座新道商店街連携

平成２３年度は、宇治☆山田プロジェクトとして伊勢の夜祭(7/23)に岩手県山田町の「山田の醤油」を使った焼きトウモロコシ、焼きイカを販売した。昨年度は、伊勢の夜祭に(7/19)に１０年ぶりに人気メニューであった「新味知海鮮カレーうどん」（伊勢うどんの麺に海鮮カレーをかけたもの）を復活させた。２００食を販売したが、約１時間半で完売した。

７月２０日（土）に行われた「伊勢の夜祭」出店した。今年度も昨年度同様に「新味知海鮮カレーうどん」を販売した。今年度は昨年より２００食増やし３００食を販売したが、昨年と場所や気候の関係もあり２００食をも販売することができなかった。また、今年度は私たちが参加するだけでなく大学内の奇術サークルや写真部にも協力していただいた。

⑤ 宇治山田の和紅茶

伊勢市の浦之商店街の木下茶園さんと連携し「宇治山田の和紅茶」の商品企画をした。今回は、パッケージ、袋の組み合わせを２種類にした。今回は、初めて商品企画であったので、１００袋（５０袋×２種類）を発注した。

和紅茶は、普通に市販されている紅茶とは違い、普通の市販の紅茶は茶葉を完全発酵したものだが、和紅茶は茶葉を半分だけ発酵（半発酵）させたもの。どちらかと言えば烏龍茶に近いような飲み口でとても飲みやすく、ストレートティーが苦手な人でも、砂糖やミルクなしでも飲むことができる。１袋５００円（税込）で販売している。今現在は、主にイベントなどで販売しているが、chikenkogakkan@gmail.com でも受け付けている。

⑥ 全国お茶まちづくりカレッジ 2013 in 宇治

京都文教大学からの案内で、今年度より参加した。これは、全国お茶まつりに合わせて開催され、全国のお茶やカフェなどに関する取り組みをしている大学が参加した。

１日目は、宇治橋通り商店街でお茶まつりに合わせて、宇治橋通り商店街で商品を販売した。研究会では商品企画した「宇治山田の和紅茶」、マザーフルーツさんの「神宮白石クッキー」、川原製茶さんの「遷宮茶」を販売した。

２日目は、ゆめりあ宇治にて各大学の活動報告や、パネルディスカッションを行った。研究会も登壇し発表や紹介、質問への対応も行った。

Ⅴ．地域との連携の具体的な状況

まず、伊勢銀座新道商店街では、伊勢の夜祭だけでなく、大学の講義などでもお世話になっている。また、新道商店街の中には「皇學館大学まちなか研究室」があり研究会活動のみならず大学の講義（社会臨床実習）でも活用している。また、研究会活動や講義のみならず商店街の中を通ると商店街の方が気軽に声をかけてくださる。特にしんみち商店街においては、イベントなどだけではなく、清川構想などのように講義としてもしっかり入り込んでいる。高柳商店街でもそうであるが、イベントなどの参加や連携だけでなく実行委員会の会議から参加しており、イベントのスタート段階からかかわっている。

和紅茶の商品企画にいては、伊勢でお茶を販売されている木下茶園さんと連携し、木下茶園さんとは「皇學館の学生がこんなにも熱心に考えてくれているし、うちも学ぶことがあるだろうから協力させてもらいます。」などのようにおっしゃっていただき、学生だけでなく

地元企業の方も一緒になって伊勢（三重）のを盛り上げていくことができる。
　また、伊勢市とも連携しているので、民間や私たちだけではできないことを協力していただき、行政という目線から私たちでは気づくことができないアドバイスもいただき、単に私たちだけが一生懸命取り組むだけでなく、時には商店街の打ち上げに参加したり、商店街の人が遊びに来いって誘ってくださったり、ご飯を一緒に食べに行ったり、ただ会議やイベントに参加するだけでなく普段から交流を深めている。
　このように、商店街、伊勢市、伊勢市観光協会、民間企業などと公的な場だけでなく、普段から親しく交流することでより良い関係が築け、さらに伊勢（三重）を盛り上げていくことができると思う。

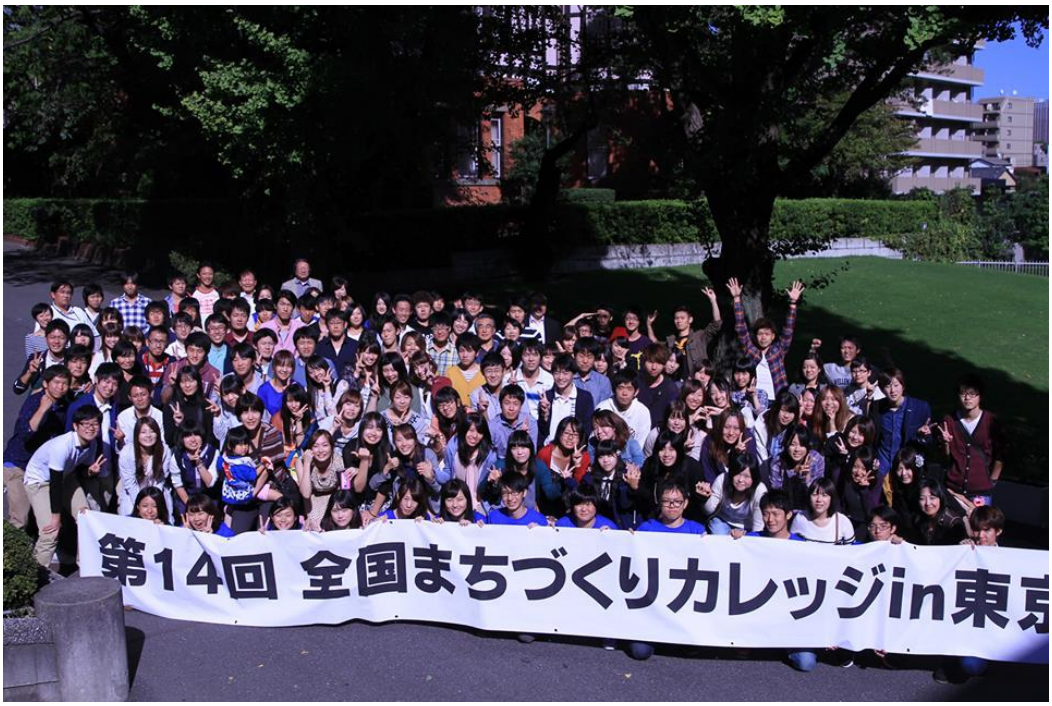
Ⅴ. これまでの取り組みの課題

　しんみち商店街の「伊勢の夜祭」に参加した際、今年は去年と販売場所が違ったため、売れゆきが良くなかった。そのため販売に関する場所の交渉が課題となった。
　高柳商店会の夜店に関してはゲーム機の作成だけが目的となってしまったため、今後は目的の見直しが課題となった。
　宇治☆山田プロジェクトで関わりがあった観光協会については、時間のない中、商品の仲介販売という急なお願いをしてしまったため、余裕をもって計画を立て、お願いに行くことが課題となった。
　和紅茶に関しては、製造期間が短かったため、パッケージにシールを張ったものを販売することとなった。前もって計画を立て、余裕をもって商品の製造に取り組むことが課題だった。
　まちカレ、お茶まちカレに参加したことに関しては、東京で行われた時も、京都で行われた時も商品を販売したが、その商品管理がうまくいかないところがあった。その結果きちんと商品管理をすることが課題となった。

Ⅵ. 今後の方向性・将来の夢

　しんみち商店街の「伊勢の夜祭」に関しては今年で 3 年目となる継続のある活動であるから、これからも継続させて出店していきたいと考えている。さらに、当日の販売がうまくいくようにもっと積極的に実行委員会に参加するなど全員で取り組んでいきたいと考えている。
　高柳商店街の夜店に関しても、しんみち同様に継続して出店し、今後どうやって商店街の人と関わっていけばより双方にとってプラスになるような活動となるかを考えていく。
　観光協会は「結ポタ」「寺めぐり」という現在進行中の活動があるためそれを継続し、伊勢についての知識を深めていく。
　和紅茶に関しては、今後さらなる販売経路拡大を目指していく。
そしてパッケージのデザイン、中身の茶葉に関しても関わり、より「皇學館大学地域社会研究会」が開発した商品であると言えるようにしていきたいと考えている。
　まちカレ、お茶まちカレについては来年も参加し、他県の大学生とかかわることで地域活性化について情報交換をし、地域活性化についてさらに理解を深める。

今後は、商品を販売する機会があれば、和紅茶を販売していきたいと考える。商品企画を行ったので今後は、商品開発をやってみたいと考えている。

また、今まで参加してきたまちカレにも今後も参加していき、他大学の学生との交流を深めていき、情報の共有など、自分たちの活動を知ってもらいたいと考える。

新年度で学生も増えるため、新１年生を増やして活動の幅を広げていきたいと考える。